

エンカウンター (ENCOUNTER)

第 142号

平成26年2月20日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.gr.jp/>

石館守三先生の文章より (4)

先生の横顔 (式辞・小西芳之助先生葬儀)

人生は、神の深い御摂理のもとにありといたしますならば、ひたすらに神をたずね、その福音にあずからんとする忠実なる下僕^{しもべ}、そして誠実なる牧者の生涯は、それ自身、神のあかしをわれわれに伝えるものであり残る者たちに対するこの上なき遺産であると存じます。そういう意味で、ここに、故小西芳之助牧師の生涯を皆様と共に顧み、そして、葬儀の式辞といたしたいと存じます。

[小西先生との出会い]

小西先生と私の初めての出会いは、今から 53 年前の大正 11 年、はしなくも東京大学のキリスト教家庭寮である同志会に入寮したときに始まりました。小西師はすでに 3 年生で、私が初年生であり、また先生は法学、私は自然科学の薬学であり、しかも、大阪弁と東

北弁の持ち主、まことに普通なら相まみえることすら難しい境遇にあった訳であります、わずか1年の触れ合いでありましたが、それが後に、相互に不思議な御縁として展開したことは、まったく予期を絶したことであります。

先生は、卒業後直ちに安田信託社員として関西に職を奉じた関係上、戦争直後の昭和21年、夫人の遺骸をいだいて上京されるまで25年の間は、私も会う機会が少なかったのであります。

短い同志会寮における生活でしたが、先生の一風変わった人となり、特に信仰に対するまっすぐな姿勢は、私には異様とも、驚異とも感じられた訳であります。寮の毎日の朝拝と金曜日ごとの祈祷集会、そして、日曜の教会出席は、寮生の三つの義務でありましたが、これを完全に履行した人は、おそらく小西先輩ぐらいであったと思うのであります。そのときすでに小西先生は、信と行の修行に取り組んでおられたことを知ります。

ややもすれば理知に偏り、これを誇らんとする傾向の東大生の集まりでありますから、金曜会の議論も、時には求道的姿勢から脱線することもあります。そのとき独り敢然として、しかも、真摯に自分の信仰告白をして動じない先輩に、私は畏敬の念を禁じ得なかつ

た訳であります。その当時は、キリスト教信仰の何ものであるかを知らない私には、異様とも感じられたことを思い出します。私を小石川白山教会でのモーク先生のバイブル・クラス、また同時に、大手町の内村鑑三先生の聖書講解に、最初に連れて行ってくれたのも、この1年間のことであります。

〔天国の外交官としての再出発〕

小西先生は、25年間の会社の生活に別れを告げて、青年時代の彼の希望、先生の表現を借りるならば、「天国の外交官」に、すなわち、伝道者として立とうとの抱負をいだいて上京されたのであります。しかし、当時の戦後の混乱と、経済環境は先生に非常に重くのしかかっていたことであり、当時まだ成人しない3人のお子さんを引き連れての転身は、容易なものではなかったと想像に難くないのであります。この時期は苦難の時期でありましたでしょう。この天国の外交官は、その志が純粹単純であるだけに、この俗世界においては、成功はおぼつかないのではないかと、彼を知る友人で、ひそかに危惧していたのは、私だけではなかったろうと思います。

〔教会の出発〕

しかし、神の摂理は深いかな。彼を力づけ、彼に協力の手を差し

伸べてくれた友人たちが、彼に与えられたのであります。今ここにその人々の名をあげることは割愛いたしますが、伝道所開設にあたりましては、八木家の人々、また、畏友・酒枝義旗先生とその同志の人々は、その教会の出発にあたって忘れ難い協力者でありました。

日本基督教団の一教会として、一年後に出発しましたが、教会の行事や牧会的な活動は二の次で、もっぱら聖書講義と、信仰と救いの本質を説くことに献身された先生——皆さんがご承知のとおりであります。

教会の看板は出したものの、その門をたたいて失望して帰られた人もありましたでしょう。苦言を呈して去られた方もおられます。また、求道初心者には難解な先生の説教にまごついて去った人もあったと思います。

〔福音の本質を体得してくれる信者〕

しかし、先生は教会の盛んなことは願わず、数人でもよいから、真に福音の本質を体得してくれる信者がいれば満足であると、常に語っておられました。数人、いや、一人でも福音をもって立ち、神の助けを得るならば、日本を動かすことは可能であるはずであります。真理の力はかくあるはずであります。われわれは、人知を以つ

て軽々にこの問題を判断することは危険でありましょう。

先生は、1961年～62年、さらに1971年～72年の2回にわたり、ロマ書の講解説教に心血を注がれた訳であります。さらに、もし許されれば、10年後の81年から、もう一度3回目の講解をしたいものだと思っていたことを思い出します。

パウロの説く所のキリスト教への信仰には、先人にもきら星のごとく沢山の教えがございますが、小西先生が心血を注いで身をもって口伝したものが、また新しい生命力と感化とを与えたことは確かであります。

〔最大の遺産〕

先生の生涯を通し、われわれに残した最大の遺産を私なりに簡潔に申し上げると次のごとくであります。

キリスト・イエスの十字架のあがないの信仰は、理解することは可能であっても、これをわがものとして持ち続けるということは、凡人には極めて難しいものである。そのためにつまづく人も沢山あるが、これを続ける方法もロマ書においてパウロが教えていること、煩悩具足の凡人には、その信仰を持ち続けるということは、極めて困難であるということを先生ご自身の体験から、しばしば、教会員

に話されております。でありますから、それを万人の救いとするためには、ロマ書 10 章 7 節以下の「口でもって、キリストを救い主と告白すること」、さらに具体的に言うならば、「わが主イエスよ」と毎日、毎度、口に唱えること、すなわち“称名”こそ、凡人に与えられた神様の恩恵である。そのことによって永遠の生命にあずかる救いが完成するのである。

〔難信易行〕

このことを先生は、自分の 60 年の信仰生活の結論であると、はっきり申して、これを先生は“難信易行”ということばで、ここで講釈されております。

これは、キリスト教の信と望の本質を説いたものであります。それをもって、それを土台として、我々は現世の生活を励むのであります。しかも、その仕事は、必ずしも大きなことでなくてもよろしい。極めて平凡な、自分に与えられた現在の仕事を全力を尽くしてやること、それがこの世における愛の行為であると言われております。

特定の事業をやったり、慈善事業をやるだけが愛じゃないということであります。これは非常に味わいのあることばであります。愛

の行為は、必ずしも特定の目的のもとに愛の行為をやろうとすることにあるのではないんだ、われわれに与えられた平凡な、この世の仕事を愛の精神をもって遂行すること、これがこの世における愛の行為であると、この世を浄める原理であるんだということを意味します。

これは平凡なことのようではありますが、先生が一生を通して、これを自ら実行して、われわれにそれを示したと考える訳であります。

〔マルタとマリヤのたとえ〕

神は二物を与えません。先生はこの世ではわれわれが望むところの学識や才能には恵まれなかったかも知れません。しかし、永遠の生命を受くる道を説く賜物を与えられました。誠によき賜物を与えられたと、今さら思う訳であります。

我々は、ルカ伝のマルタとマリヤのたとえで、マリヤはよきほうを選んだとイエスが言いましたが、誠に、この世のいろいろな業を選ばずして、このこと一点に、この道を選んだことは、誠に神の恩恵でありました。私が、先生を助けたということは、マルタの役目をしただけでありました。私もこれを反省する訳であります。

〔人生受け難し、仏法会い難し〕

「人生受け難し、仏法会い難し」と仏教で言います。我々は、人生をお互いにこの世において共にし、幸いにしてわれわれは、救いの福音を一生を賭して説いた先生を通して、その福音の奥義にあずかった。しかも、先生の一生の手本をわれわれは見せて頂いた。この人生の出会いに、われわれは誠の感謝を捧げたい。そして、この神の賜物を、われわれの余生に生かし、周囲の人々に伝えることを期して、告別の式辞と致します。

(1980年4月13日、高円寺東教会に於いて行なわれた小西芳之助先生葬儀における式辞。出典：『小西芳之助先生余芳』)

注 小見出しと〔 〕は、編集者がつけた。

補遺 [教会創設時の思い出]

先生が本所教会での6ヶ月の牧会を切り上げて、自立して伝道したいので拙宅の庭の一隅を使用させてくれればの旨の懇談のとき、私もちゅうちょなく同意したのであった。そして、八木家からは余裕のない中から、バラック建てながら住宅の提供があり、礼拝室はしばらくの間は私の家の2階を使用した。これは昭和24年3月のことであった。数年後には旧家屋の一部を切り離し改修して教会堂とした。

教会の発足に当っては、酒枝義旗先生とその同志、ドイツからの伝道師エッケル師、岡田謙先生、また米国のメイヤー先生ご夫妻、モーク女史などの協力があり、忘れ難い貴重なご芳志であった。私は土地と教会堂を捧げこそすれ、先生の自尊自立を尊重する意味で、他に金銀のご援助は一切遠慮したのだが、教会の必要なものはすべて与えられて、ここ30余年、徐々に強化され、財政的にも豊かに恵まれてきたことは感謝の他はない。

特に私共家族一同が、先生夫妻及び教会と同住の縁を与えられたお陰で、計り知れない霊の恩恵に浴したであろうことは、われらの計測を絶すると思われる。

無条件に信仰によって為した業は、かくも多大な恩恵となって報いられるのであろうかと、感謝以上に厳粛に襟を正さざるを得ないものがある。

小西先生は我々に金銀に類するものは与えなかったし、また与え得なかった。しかし、彼は、私らには未だ血肉化されずとも、重要な信仰と望み、とりわけ実践の模範を提供してくれた。まさに「神の知恵と知識との富はいかに深きかな」である。